

ジョージア (グルジア) 便り その51 痛みなくして得るものはない

文 高野陽年 text by Yonen Takano

テレビをつけるとアジア大会を戦うアスリートの姿があった。フィニッシュの瞬間、顔をひきつり、歯を食いしばって戦う様子は感動的だ。しかし僕らダンサーはそういった葛藤を顔に出すことはない。いくら辛くても痛みがあっても涼しい顔をして踊る。おそらく見ている方からすれば軽々とやっているように見えるだろう。だが心の中では僕らも同様に肉体の酷使に歯を食いしばっているのだ。

僕は怪我をしてこなかったプロのダンサーを今まで聞いたことがない。誰もが大きなり小なり怪我を乗り越える、もしくは抱えて踊っているのだ。手術をするものも少なくない。僕は幸い体にメスを入れたことはないが2カ月の離脱を余儀なくされる怪我を負ったこともある。

怪我は大抵調子の良い時にやってくる。実は体が疲れているのにダンサーズハイとも言える状態になって、感覚が体の限界を超えてしまうのだ。異様に体のキレが良くなったり、軽くなったりと思ったら、急に歩けないほどの激

痛が襲うことがある。これはひねったり、着地に失敗して怪我をする時以上に厄介な怪我だ。何か偶発的なことが引き起こしたわけではないので、実際の原因が何かもわかりにくい。整形外科でMRIをとっても使い過ぎですねと言われて終わってしまうことが多い。

休めばいいと医者はずぐに言うが、いったいどれほど休めば治るのかもわからず、踊りたい欲求を殺して、気丈に振る舞わなくてはいけないのだ。そもそもバレエ団の構成はサッカーチームなどと違って、怪我人を前提に作られてはいないので、周りから早く戻ってくれというプレッシャーも強い。わざと怪我をしているわけではないのにまるで悪人扱いされている気分になる。さらには時たま人数合わせのために、素人でもできるような立ち役で舞台に出るといふ屈辱も味わうのだ。

ただ怪我は自分の踊りを一度原点に戻って考えさせてくれるいい機会でもある。体の使い方を正しく矯正し、底を知るからこそ舞台に立つ喜びを再確

認できる。大きな困難は自分の演技に深みを与えてくれるものだ。僕は信じている。

『NO PAIN, NO GAIN』という英語のことわざがある。日本語では『苦は楽の種』といったところだ。直訳すると『痛みなくして得るものはない』となる。これはまさにバレエダンサーの為の格言であるだろう。そして日本には

『怪我の功名』という言葉もある。怪我をしないことに越したことはなく、長く健康に踊ることができれば一番であるが、怪我もまた自分の芸の肥やしになると考えて前進するしかないだろう。全くタフな仕事である。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

